小池辰雄著作集　第３巻『無の神学』

第二部　無の神学への道

第四章　無教会神学論

　（１９４９年８月１８日）

序

ここに取り扱う「無教会神学論」という主題について始めに簡単な見当づけをなさねばならないと思う。無教会には未だ学的体系的神学なるものはない。即ち「無教会神学」といわるべき対象がないので、この主題は明日の課題であるといえよう。しかし昨日の対象として無教会には果して神学的精神は無かったであろうか。また今日の問題として無教会は神学を必要としないであろうか。否。必要不必要の問題ではなく、神学というものの認識を新たにするとき、福音の学として、また信仰的実存の自覚の内実に於て、神学──必ずしも体系的なるものを意味しない──は当然みられねばならぬのではないか。最早それは自明的なことで、無教会は従来その点に関して、的であったことを自認しなければならないのでないか。たとえその短所は歴史的に顧みて無教会のまた別な長所を伸ばす上に必然であったとは言えるとしても。「教会」にとっては神学は正に「教会の学」であるのだが、無教会にとっては神学は如何なる性格のものであろうか。これらの問題をって荒削りながら、検討してみたいと思う。このことは確かに無教会が世界の教会史における自己の地位を歴史的に自覚すべき時期に来ていると思えばこそ、自らの存在に対して設問すべき重要なる一課題なのである。

そこで先ず第一に、無教会の本質と使命とを端的に指摘し、その本質と使命の故に無教会が神学に対して如何なる関係を有つかを指示し、次に無教会において、歴史的に神学はどのように顧みられて来たかを探ね、現在いかに無教会が神学を一重要課題とすべき時期に来ているかを見究め、然らば「神学する」ということはどういうことであるかを自らに問い、最後にかく自問したる筆者は如何に神学しつつあるか、無教会的実存は筆者において如何に自覚されるか、福音は二十世紀の東洋において如何に新しく把握され得るか。その神学的告白としての「砕け」の根源性格は如何なるものであるかを告白しようと思う。この小論が無教会神学の前進に資し、将来無限に展開さるべき無教会神学の一指標たるを得ば幸である。

（一）無教会の本質と使命

# 【目次】

●棄てられた石　　●「我が名による集会」　　●祭司宗教と預言者宗教　　●無教会の使命

「イスラエルを贖う者、万軍のヤーウェー此く言い給う、

『我は始なり、我は終なり、我の外に神あることなし』」（イザヤ44･6）

「懼るな小さき群よ、汝らに聖国を賜うことは、汝らの父の御意なり」（ルカ12･32）

「われ都の中にて宮を見ざりき、主なる全能の神及び羔はその宮なり」（黙示録21･22）

# ●棄てられた石

キリスト教の歴史はその教会の歴史を抜きにしては考えられない。しかしながら福音の最も具体的な隠された歴史はいわゆる教会の歴史をふくみながらそれをはみ出た幅と深さとを有つものである。イエス・キリスト彼自身がそのはみ出しの先駆者である。彼自身が教会を超えた、そしてまた教会の底に在ってこれを支えている

「の」（詩118･22、エペソ2･20）

である。実に彼はユダヤの神殿宗教からは

「棄てられた石」（詩118･22）

であった。かかる彼が神殿宗教の伝統を再び形成した「教会」宗教の創設者であったとは考えられない。マタイ伝16章18節、18章17節の「エクレシヤ」問題の学的検討は当面の私の課題ではないが、イエスがあの際パウロにおけるが如き、或は更に降って正典結集前後におけるが如き、組織化制度化を進めつつあった教会の原型をすら考えて居られたとは考えられない。

# ●小さき群

イエスにとっては「神の国とその義」を求むる「神の民」が問題であった。イエスは彼に従う「小さき群」に終末的な希望をかけて居られた。「時は迫って」いた。そのような歴史の終末を凝視しての終末的現実を極めて活き活きと自覚しておられたイエスにとって、職制的教会なるものが問題となるなどは考えられない。かかる判断は歴史的相対的に妥当するのみならず、イエスに即した神学的判断として成りたつものである。職制的教会形態形成以前のイエスのエクレシヤは正に

「二、三人わが名へと集る所、その中にこそ我は在るなり」（マタイ18･20私訳）

にその本質か語られてある。「二、三人」というところに数量的限定を超える動的な自由があり、「わが」というところにイエス・キリストがエクレシヤの絶対的主体である宣告があり、「名の中へと」に聖霊の導きを指摘する最も重大なるポイントがある。かくして「集る所」は即ち、単なる固定化された場所の概念ではなく、その時が一回限りである非連続性をもった極めて動的な場所である。もしそこに連続があるとするなら、それは神の永遠が我らのその終末的現実を永遠の側で隠しつついでいるまでで、我らの側にはあくまでも非連続があるだけであり、連続は祈り求めにおいて考えられ、恩恵として受けとられるだけである。かかる終末的現実の「集り」、それがイエスの、「わが名の中へと」「呼び出だされた者たちの集り」すなわち「エクレシヤ」であったはずである。そこにこそ「我」はその中にあるなり、という真の教会の現実がある。そしてかかる者どもに対してイエスは

「るな小さき群よ、汝らにを賜うことは、汝らの父のなり」（ルカ12･32）

と確言し約束された。終末の神の国の胚種たる、動的なる聖霊の集める「小さき群」！　何たるとらわれざる自由の群よ！　私は「教会」の本質と現実がかくも終末的性格のものであることを強く主張せざるを得ない。聖霊による自由によってつねに新たに集まる集会、そういう集会がイエスの終末的教会礎定であった。その意味でのみイエスは「教会」の礎定者であった。それ故にイエスの「二、三人」や「小さき群」は、本当は「エクレシヤ」とは異なる動的実存共同体、どこまでも終末的な神の民の概念であって、弟子たちの形成した「教会」とは趣きを異にする。絶対に限定化固定化を排する「小さき群」こそイエス自らの対象として考え給うたものであり、イエス・キリストを主体とする客体たる「神の民」たる共同体である。無教会の本質はどうしてもイエスの「二、三人」と「小さき群」（ト・ミクロン・ポイムニオン）即ち終末的な神の民にその根源概念を有つと見なければならない。是れこそ本質的には正当なる、歴史的には逆説的なる表現「無教会」の根源の相である。

# ●「我が名による集会」

「無教会神学」というとき、その「無教会」の本質をイエスの「小さき群」の「神の民」的超教会的、終末的性格にって指摘するのが最も根源的であると信ずるので、かくの如く述べ起こしたのであるが、これはけだし、いつまでも無教会の拠って立つ根本命題であるのみか、同時に全エクレシヤの根本精神でもある。しかもそのことは現代の大神学者カール・バルトの既に指摘したところである。彼は言う、

「二、三人我が名によって集る所には我もその中に在るなり。我！　これこそ教会の公同性を基礎付け、維持し、確立するものである。これがなければ、教会は要するに教会ではない」（カール・バルト『教会の概念』紅松保雄訳、26頁）

しかし問題は本質把握の対象面が同じでも、それの主体面に、またそれに相即する教会的実存の相にあるのであって、そこに「無教会」が他と異なるものがあるはずである。

# ●祭司と預言者

次に我らは無教会の使命に就て考えようと思うのであるが、そのためには祭司と預言者という歴史的な存在の使命を考察してみなければならない。さて信仰と生活の分離を執り成すものは祭司である。洋の東西を問わず、祭司階級と僧侶階級というものは宗教の伝統をつくる主役者であるといえよう。これに反して、信仰と生活の分離を審判し、本質を語る者は預言者である。そして預言者は特にユダヤにおいてあらわれた独特の存在であった。旧約と新約の歴史を貫いて祭司的宗教と預言者的宗教の並行することは争われぬ事実であり、また深い必然であると思う。たる個人とその形成する社会、民族、国家というものが信仰と生活に分離と矛盾があることは必然である。それを執り成す者として、いかにその方途に誤謬や欠陥があるとしても祭司による執り成しの必要は必然であった。むしろモーセに啓示された啓示宗教が、その救済の途において祭司を要したのである。祭司的執り成しはすでにモーセ自身においてこれを見る。少なくともモーセの祈りの原型に純粋なる執り成しがあったと信ずべきである（出エジプト32･11～14､30～32参照）。しかしイスラエルの宗教が神殿宗教となったときから、その祭司的性格が前面に出で、新約時代となってはエルサレム教会において継承され、やがてパウロの異邦人教会の中間時を経てローマ・カトリック教会に於てユダヤ的祭司宗教の復活を見、カトリック的伝統は正に連綿として審判の日にまで到らんとしている有様である。これに対して預言者的に信仰と生活の分離を審判し本質を告示する面も亦同じくモーセに現われている（出エジプト32･19～20）。即ち、律法の板を「ちて砕き」、の偶像を「火に焼き砕き」たる怒において、神の審判を現わしている。これは神話をふくんだ記事であるとしても、極めて重要な真理をふくんでいる。人間の宗教たる偶像崇拝を攻める神の怒は、かに啓示の宗教の主張であって、啓示宗教は一切の宗教に反対する。預言者が弁論してやまぬものはこの啓示宗教の弁護であり主張である。そこに必然人間の宗教への批判、審判があるわけである。

# ●祭司宗教と預言者宗教

この如く同じモーセにおいて祭司的執り成しと預言者的審判との両面があったことを我々は見逃してはならない。モーセに関わる神話的な面をとりのぞくとしても、モーセの生涯そのものが祭司面と預言者面を実証している。その真に信仰的実存における祭司面と預言者面とが遊離してしまって、この両面が信仰的実存者によって同時に担われず、神殿中心の制度的祭儀宗教においてその祭司面が、また誡律的宗教命題においてその預言者面が担当されたところにイスラエルの宗教の限定化、固定化が生じ、それが再びキリスト教教会史において夫々一面的にではないがカトリック的祭儀主義とプロテスタント的信条主義において繰り返されているのである。預言者はすなわち鋭く審判の面を前面に出だし、信仰の枯死、生活の分裂を審判したのではあるが、そしてかかる神殿宗教の信仰的実存からの背離を攻めたのであるが、預言者は単に神の審判を告げ且つ信仰の本質を啓示しただけであったのではない。それは前面の戦闘的正面であるが、その背面には深く、おのれの実存を以て担う執り成しがあったのである。その最も代表的なものはすなわち、ホセアであり、エレミヤであり、第二イザヤと称せられる「無名の預言者」であった。実は真に預言者的な実存は同時に最も深く祭司的実存であらざるを得ないのである。この啓示宗教の信仰の実存を決定的に実存した者こそ、ナザレのイエスであったのである。彼は罪の贖いを果したる唯一の大祭司であり、人類の罪を底の底まで審判しまことの救済の道を開示した唯一の大預言者であった。彼ほど罪を審きたる者なく、彼ほど罪を赦したる者は絶対に無い。それは全く次元的相異であり、救済の啓示的事実であり、メシヤ、キリストとしてのイエスが救済の啓示的事実として出現しなかったらば旧約も空しく、新約も空しきものとなったわけである。かくてキリスト・イエスの使徒らの実存は、預言者面と祭司面をキリストを通して有っているわけである。ペテロ、パウロ、ヨハネ、然らざるなしである。然るに教会の歴史は再び信仰的実存共同体の宗教から、欠陥も大いにあったであろうが、終末的性格の生きていた原始キリスト教の創業時代から、固定的な、連続的な、教会宗教へと移行していった。イスラエルにおいて曠野の幕屋宗教が、都会の神殿宗教に移ったように。

# ●神殿宗教と幕屋宗教

それ故に預言者的、祭司的という対立概念は、実は一方を是とし、一方を非とする対立概念ではなく、相関相助すべき概念であり、真の意味において転入性を相互に有っていなければならない。むしろ私は幕屋宗教と神殿宗教という言を以て神の啓示に即せる動的な宗教と、人間の要求になずむ静的な宗教とを区別したいと思う。このことにおいて次のバルトの言を引用し得ることを、私は教会の人々のために喜ぶ者である、

「私は信ずる、教会は栄光を神に帰しまつり、従って自らは神的栄光を断念するところの場所であるとのことを。……教会はかかるものなるが故にこの世の終りに至るまで神の王宮であるよりは寧ろ人間の中にある神の幕屋（Gottes Hütte）たるべきであることを。」（前出書、27頁）。

一九〇〇年間の教会の歴史において、さきに述べた教会の、エクレシヤの根源的自覚が欠けて、教会という伝統形態をば墨守的に伝承して来たのがその大勢であって、正しき異端者も宗教改革者も、その預言者的役割をつとめつつなお神殿的教会宗教に対して幕屋の動的質的な対立をなし得なかったと言わねばならない。その点において、ルッターの宗教改革はある意味では本質を道破しながらも教会の禍根を打ち砕くまでの役割は果し得なかった。ある意味でそれは歴史的使命の然らしむる必然で、それ以上を改革者たちに求めることは不当であろう。その教会宗教の欠陥を鋭く指摘して独り反抗した悲愁の預言者はすなわちキエルケゴールであった。

あやまれる祭司宗教になるのが、信仰と生活の分離を来らす罪びとたる人間の、悲しむべき現実である限り、プロテスタント的前面が教会史の浄化運動として現われるのも当然で、そこにプロテスタントの塩としてのまず評価さるべき意味がある。それ故に、プロテスタント的な動きは預言者的役割を正面に有つわけである。

# ●無教会の使命

現代に至ってこの大和島根に一人の預言者が出現した事実を教会史は否定することは出来ないであろう。言うまでもなく内村鑑三の出現である。叙上の如き神殿的祭司宗教、「教会精神」に対して新しきプロテストをしたのが内村鑑三であった。彼に発する我ら無教会的基督者は、無教会主義という主義にして主義にあらず、運動にも非ざる、福音の根源力による動き、しかもそれは飽くまでも、教会史の現実から遊離したものではなく、正に教会史の中から活き活きと迸り出でたる者として、福音に即して不断に教会の現実にプロテストし、不断に自己自身（無教会）にプロテストして、即ち砕き、且つ砕けつつ前進する者である。そこに無教会の実存の使命がある。預言者的に自他を批判し、同時に祭司的に執り成しつつ更に深く預言者的に全エクレシヤの現実を担う使命、無教会がかかる使命をこの歴史的現実において担わせられていることを真に新たに自覚しなければならない。かかる本質や使命の自覚と、現実の不断の自己批判とのために実に必要なるは神学的精神と、無教会神学の創造的な営みであると思う。

# ●聖霊の火

無教会は教会山脈の中から噴出した火山の如きものとして自らを自覚し、すなわち教会史の老化現象の中から新しき火柱を建て、噴煙を揚げて天にせしめ、以て全世界の頭上より改悔の灰を降だし、自らは絶えず聖霊の火に身を焼かれつつ同じ火となり灰となってこの大地のどん底の層を担わんことを、ただ主の聖力によって願う者でありたい。無教会の現実が此の如き聖霊の愛よりなお遠きを想えば想うほど、わが言は自らに対して烈しいのである。

我らは真に世を愛すべき（ヨハネ3･16）課題を担う！　これキリスト論的・終末論的倫理の課題である。